

「神われらと共にいます」

イザヤ書 第9章 6節～7節
マタイによる福音書 第1章 18節～25節

説教 岡村 恒牧師

『「見よ、おとめがみごもって男の子を産むであらう。その名はインマヌエルと呼ばれるであらう。これは、『神われらと共にいます』という意味である。』(23節)

『神われらと共にいます』、これが全ての救い主、主イエス・キリストの名前です。このお方の誕生は、今ここにいる私たちと、全知全能の神、世界の創り主である神との関係がはっきりする出来事だったのです。

聖書は、神と私たちの関係を明らかにするために、私たち人間の期待や想像をはるかに超える仕方、救い主をお送り下さいました。

この夜、ヨセフはとても苦しい決断をしたのです。愛するマリヤを「ひそかに離縁」(19節)するという決断です。ヨセフは神との関係を定めた《律法》を聖日に守る「正しい人」(11)でした。律法に従うと、まだ結婚をしていない女性が妊娠すると《姦淫》と見なされて石打の刑に処されるのが当然でした。しかしヨセフは、律法と愛情との間で、自分の身が引き裂かれるような思いで決断をしたのです。マリヤの妊娠が公けになって石打の刑にされないよう、こっそりと婚約を解消してどこか離れた場所に逃がそうと考えたのです。恐らく身もたえするような悲しみを抱えたまま、寝るとはなしに身を横たえていたこの夜、主の使いが夢に現れて、神の驚くような計画を告げました。

マリヤの「胎内に宿っているものは聖霊によるのである。」(20節)これはそのまま信じることが出来る話ではありません。主の使いは、さらに続けます。「彼女は男の子を産むであらう。その名をイエスと名づけなさい。彼は、おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となるからである。」(21節)イエス、すなわち《主は救い》という名前まで決められています。その名前が表す通りに「おのれの民をそのもろもろの罪から救う者となる」と約束されました。ヨセフはこの絶望の夜、特別な仕方、神から語りかけられ、すべての者の救いに関わる重大な知らせを聞いたのです。

この夜の出来事は、イザヤ書第7章14節にあらかじめ記されていた神の計画が成就するための出来事だった、と聖書は記します。今私たちは、この預言の言葉の意味を知ることができませんが、当のヨセフにはまだ分かりません。恐れと驚きの中でこの知らせを聞いたに違いありません。夜の決断が、根底からひっくり返されて、想像さえしたことがない神の計画のただ中に、

自分とマリヤが置かれていることを知って朝を迎えました。

聖書は、クリスマスの意味、すなわち、主イエス・キリストの誕生の意味を、《神の計画の実現》という一点に集中して語ります。イエスという名前も、インマヌエルと呼ばれることになるという預言の言葉も、主イエスの誕生という出来事の意味を明らかにしています。神がひとり子主イエスを人間として地上にお送り下さったのは、ただ私たちすべての人間を招いて、罪の赦しを与え、神と共にいて下さることをはっきりとお示しになるためでした。

私たちも繰り返し《ヨセフの夜》を経験します。自分の人生設計が根底から覆され、自分の将来が深い闇と悲しみに包まれる中で、自分の知恵と力を振り絞って決断をする夜です。しかしなお、悩みと悲しみから解放されない夜です。自分の判断が本当に正しいのか、神の御心に適う決断かどうか迷います。聖書は、まさにその夜、神が私たちに語りかけ、神の救いの御計画をお示し下さる、と語ります。

あのヨセフの夜を、私たちも自分自身の人生の中で、繰り返し経験するのです。神が、この私を御心に留めて下さり、この私の罪の赦しを成就するために、ひとり子、主イエス・キリストをお与え下さいました。主イエスを十字架に架けてまで、私を罪と死から贖(あがな)い出して下さいました。主が救いであること、神と共にいて下さること。このことを私たちが知り、信じて生きるようになるために、神はヨセフの夜をお与えになるのです。

多くの場合、私たちはその夜には真実を知ることが出来ません。しかし後になって気づかれます。あの夜の経験を経て、《ヨセフの朝》を迎えたこと。自分の人生全体が、確かに神の救いの計画の中に置かれていることを知り、確かな足どりに歩み始めた朝が与えられるからです。

ヨセフのように、私たちひとりひとりの人生も、神の救いの約束の中に包み込まれています。ひとり子主イエス・キリストがお生まれ下さったのも、やがて世の終わりの日に再び来て下さるのも、私たちが完全な《ヨセフの朝》を迎え、主を讃美して永遠の命を生きるようになるためです。アドヴェントに、主の御再臨を心待ちにしながら主を讃美しましょう。

(記 岡村 恒)